



令和 大禮と伝統文化

この機に日本の文化と道徳を考える

道德科学研究センター 伝統文化研究室室長

橋本 富太郎

昨年は天皇陛下が御即位され、年号も平成から令和に替わりました。それに伴い、皇位継承儀礼が五月一日の「剣璽等承継の儀」を皮切りに、秋の「即位礼」大嘗祭」を中心として十二月に至るまで滞りなく執り行われ、現在も関連の行事が全国的に続いています。

中でも「即位礼正殿の儀」は、百九十一もの国・地域・国際機関、および各界の代表が参列し、その数が約二千名にも及ぶ盛大な式典でした。

参列した要人たちの感想からは、その深い感銘が伝わってきます。例えば韓国・李洛淵首相の「とても荘厳な日本の歴史と文化を感じる事ができました」とか、アメリカ・チャオ運輸長官の「歴史と伝統に包まれ

た非の打ちどころのない完璧な儀式でした。テレビや来賓を通して世界に日本の文化について多くを伝えることができたと思います」(TBS・Nスタ、10/22)などです。

このように、皇位継承儀礼には日本の歴史と文化が継承・凝縮されており、それ自体が貴重な文化財であるといえます。さらに王貞治氏が「平和と幸せ、ということを天皇陛下も言われていました。普段感じることができない日本の良さを感じられる式典でした」(「朝日新聞デジタル」10/23)と、皇室に象徴される日本の精神を感じられたことは注目すべき点でしょう。

これらの印象からも分かるように、御大礼には日本の精神性、さらにいいますと道徳性が大いに表され

ています。とりわけ「大嘗祭」をはじめとする諸神事は、感謝報恩と愛他的精神に満ちており、これに関わった人々には、「大変な名誉で、生産者にとっては最高の幸せ」(「京都新聞」Web、5/13)と言われているように、喜びと励みをもたらすものでした。

こうした道徳性について、モラロジの創建者・廣池千九郎は、皇室を二つの視点から詳細に論じています。一つは、道徳実行者の系譜として世界の五つの道徳系統の一つに皇室を挙げ、国際社会の中に普遍化しています。もう一つは、恩人の系列として「親・祖先」と「精神的指導者」に「国家」を加え、皇室を「国家伝統」と称し「伝統」の三者の一つに位置づけています。以上のような皇室論は、現代とこれからの日本に道を示す重

要な論点ですが、これまで、研究の継続性が保てないまま今日を迎えてしまいました。

こうした状況を受けて、モラロジ研究所では「皇室関係資料文庫プロジェクト」を立ち上げて、所功教授を中心に資料収集と研究を推進してまいりました。その成果は、昨年刊行された『皇位継承の歴史と廣池千九郎』などに現れつつあります。

その後さらに組織的・継続的に実現していくため、折しも御大礼の年、道德科学研究センターに新たに「伝統文化研究室」が開設されました。ここでいう「伝統文化」は一般的な意味のほかに、モラロジという「伝統」、特に「国家伝統」に関する文化という意味を含んでいます。

当研究室では、在来の研究員に加えて関係諸分野の碩学を客員として迎え、研究会を重ねており、昨年開催された「新天皇御即位奉祝記念特別展」での連続講演会には、四名の講師を派遣するに至りました。その内容は、「新天皇御即位奉祝記念特集 御大礼の来歴と意義」として『モラロジ研究』第84号に掲載の予定です。